

■ 編集だより

編集後記

インターネットの普及やオンライン文献検索の進歩と同時に多くの学術雑誌が電子化されたことによって、机上のコンピュータ端末に容易に目的の論文を表示することが可能になった。科学技術・医学分野の研究者の間で電子ジャーナル利用は今や当たり前の日常であるが、その歴史はわずか20年ほどのものである。海外の大手出版社の電子ジャーナル・サイトが公開されたのは1990年代後半であり、わが国の電子ジャーナル出版は、科学技術振興機構が1999年に開始したJ-STAGEに始まるとされる。

和文誌電子化の波も次第に広がっており、会員アンケートで多くの賛同を得たうえで、本誌の電子ジャーナル版も2014年4月号から配信されている。文献検索の容易さに加え、どこにいても読むことができ、外出先でタブレットやスマートフォンでも閲覧可能、文字や図表の拡大可能、ダウンロードしたPDF版にはマーカーを引いたり、書き込むことも可能、と良いこと尽くめである。また、郵送費や印刷費が節約され、多額の予算削減が達成されたことも事実である。もちろん、従来どおりに冊子体をご希望の会員には、郵送希望の手続きをいただいた上で雑誌が郵送されている。事務局の集計によれば、全会員の40%程度にあたる約6,800部が郵送されている。

ところで、世の流れは速く、書籍電子化は電子ジャーナルだけではなく、電子ブックの出版にも波及している。医学分野で馴染みの深いSpringer社のサイトをみると、2005年より出版する全てのブックの電子化を開始し、2014年3月に電子ブックは57,000点に達したという。Elsevier社のサイトでも15,000点以上の学術書籍を電子ブックとして搭載していると記されている。しかし、電子ジャーナルはともかく、電子ブックにはいくつかの弱点を指摘できないだろうか。電子ジャーナルに関しては、これは重要という論文を抜粋して印刷し、手元に置くこともできるのでそれで事足りる面は多い。しかし、本の場合は冊子体として手元に置くことで、電子ブックには得がたいいくつかの機能があるように思う。

1つは、読み始める前の段階の「積読」（つんどく）である。機が熟するまでその本の存在をちらちらと意識していることが重要で、電子ブックでは難しい。読み始めると冊子体には、視覚的・触覚的なページの厚みの感覚によって内容の時系列の理解を助ける面があるかもしれない。もっと大切なことは、読者の手の中で生じる本のagingであろう。濱田 秀伯 著「精神症候学」第2版（弘文堂、2009年）の序に、著者がある地方都市で講演をして降壇したところに初老の医師が近寄って来るくだりがある。医師が鞆から取り出した「精神症候学」には、ほとんどのページに日付や下線、おびただしい書き込みがあり、表紙は擦り切れて原形をとどめないほどであった。申し訳なさそうに、また少し誇らしげに医師曰く、「なにしろ毎日の外来に欠かさず持ち運び、診療後に疑問があるとそのたびに開いてみるので、こんな姿になってしまいました」。著者の精魂を傾けられた書が、幾千の読者の手の中で育てられ歴史を刻んでいく。そうした過程が見事に描写された例である。著者はこの感動を「いつの間にか著者の手を離れて歩き出し、さまざまな場所で育てているという感慨」と記述している。このような書のaging processを果たして電子ブックに再現しうるのであろうか。おそらくわれわれは今しばらく、電子媒体の便利さを享受しながら、冊子体の優れた点も大事にしていくのだろう。